

提出日 平成 25年 3月 30日

平成 24 年度 総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 (該当に○)

海外共同・共同研究・個人研究・出版助成

研究代表者 (所属・職名・氏名)

文芸学部 准教授 村井 華代

研究課題名

ユダヤ教における演劇の理念

研究分担者 (共同研究者)

なし

研究期間

2012年4月1日~2013年3月27日

研究を実施することになった経緯 (海外共同の場合のみ記入)

研究組織 [氏名, 所属, 役割分担]

個人

研究発表 (印刷中も含む) 雑誌及び図書

未発表

研究実績の概要

「ユダヤ教における演劇の理念」という一般的なテーマを掲げたが、実際に現地の演劇作品から判断するに、今日イスラエル社会において演劇を特徴づけているのは宗教よりむしろ政治的文脈であると言わねばならない。そしてイスラエル建国から今日まで築き上げられているドラマトゥルギーは、少なくとも劇場演劇に関しては周辺のアラブ諸国との戦争やパレスチナとの関係の変化のつど更新されており、ヨーロッパ各地のユダヤ社会に保存されているような民族的性質とは大きく異なっている。そのため、若干研究対象を修正・限定する必要が生じたが、このことによって演劇研究としての具体性が確保されることと思う。

作品として、タルムード、カバラ等の伝統的ユダヤ的諸特徴を色濃く反映しているS. アンスキイ (Semyon Akimovich Ansky, 1863-1920) 『ディブク』 (Yiddish: *Der Dibbuk*、Eng.: *The Dybbuk*) を取り上げる。この戯曲は、民話に基づき1912年に着手され、幾度ものテキスト変容の後、1920年にイディッシュ語演劇としてポーランド統治下のウィルナ (現リトアニアのヴィリニュス) でユダヤ人劇団によって初演された。その後現イスラエルの国立劇場であるハビマ劇場がモスクワでの活動期に初演、大成功を収めた。このことで本作はイディッシュ演劇・イスラエル演劇における記念碑的作品であり (主人公レアを演じた女優ハナ・ロヴィナは、現ハビマ劇場のメインホール「ロヴィナ・ホール」にその名をとどめる)、のみならず多数の言語に翻訳され、世界中で最も上演されるイディッシュ演劇としての地位を確立している。

「ディブク」とは、ユダヤ伝承における「汚れた霊」である。若いハノンとレアは、生まれる前に、互いの父親によって未来の結婚を定められていた。その約束の内容を知らぬまま、成長した二人は惹かれあうが、ハノンの出自を知らないレアの父は娘を金持ちに嫁がせることに決めてしまう。ハノンはこれを知って頓死、その魂は汚れた霊となってレアに憑依する。高名なラビ・アズリエルが除霊を試みるが、結局、二人の魂と身体を引き離すことはできない。

若い男女の悲恋と、ホラー映画の題材としてなじみ深い「憑依」と「除霊」が組み合わせられ、サスペンス性に富むドラマとなっている。が、「二つの世界の間に」という副題が示すように、この作品に描かれているいくつものユダヤ的二項対立の乖離と結合——生者と死者、精神と肉体、ユダヤ的信仰における魂の上昇と転落、身体的に死んでいると同時に不滅の存在となって生者に影響力を持つ個人等——に注目する必要がある。

そこで興味深いのは、そうした二項対立の関係の変容が、目に見える俳優の形によって表現されうるということだ。例えば魂という不可視の存在が、生きた肉体に憑依することで現実に声を発したり (憑依されたレアは男の声で語る)、また、結婚式の舞踊 (ハンディズムにおける慣例) が若く美しい花嫁と汚れた老婆によっておこなわれたりと、可視的な地上的身体への不可視の霊性の接近が、演劇的仕掛けによって表現されている。

従って、『ディブク』が小説ではなく舞台として完成されたことは恐らく無意味ではない。演劇における象徴主義は舞台上の日常的物事に預言的機能を付与したが、『ディブク』では俳優の身体そのものが神秘の担い手とされる。ここに見出されるのは、近代劇の対照的な二つの様式 (リアリズムと象徴主義) によって表現されたユダヤ的身体であり、俳優の身体はそこでは必然的に不可欠な媒体となっているのである。

なおこの研究は次年度の総合文化研究所紀要に論文として投稿を予定している。